

明日香をさぐる

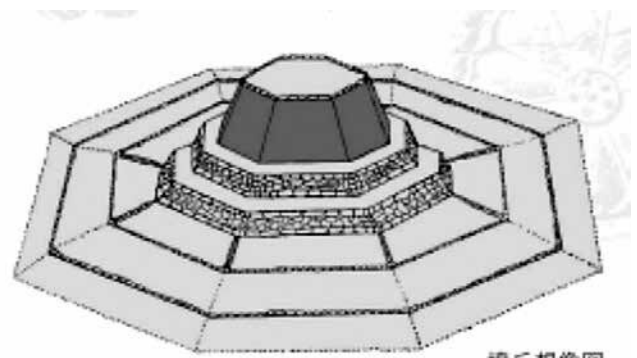
中尾山古墳発掘50周年

今回は中尾山古墳発掘50年の歩みとその調査成果について紹介します。

高松塚古墳から極彩色壁画が発見されたことを契機に、高松塚古墳に隣接した中尾山古墳にも多くの観光客が押し寄せました。当時、古墳の周辺は園路もなく、石槨も開口した状態であったことから、1974（昭和49）年に、環境整備を行うために、網干善教氏らが中心となって発掘調査が行われました。調査後の昭和50年3月には園路や解説板が整備され、昭和60年には中尾山古墳周辺が国营飛鳥歴史公園高松塚周辺地区として整備されています。

中尾山古墳は、古くから墳丘周

出された最初の事例となりました。



墳丘想像図

その後研究が進み、飛鳥時代の歴代天皇陵には八角墳が採用されたことが明らかとなりました。

また、石槨内は壁面が丁寧に磨かれ、表面には水銀朱が塗られていたことがわかりました。石槨内には90センチ四方で、築造当時は火葬骨を納めた蔵骨器が安置されていたと考えられましたが、発掘時には蔵骨器が失われていました。鎌倉時代に盗掘されたと推定され、盗掘孔が約25センチ程度であったこと

から蔵骨器は一体づくりの構造ではなく、蓋と身の部分からなる二分割できるタイプの蔵骨器と考えられます。

その他に、沓形石造物が見つかりました。沓形石造物は寺院の大屋根に設置されている「鴟尾」のような形をしています。この沓形石の端面は鎬状をしており、その角度が八角形の内角（135度）と一致していることから、築造時は墳頂部に設置されていたものと考えられます。

調査成果から、中尾山古墳は、文武天皇の檜隈安古岡上陵と有力視されています。文武天皇は、701年、「文物の儀、是に備われり」と日本国誕生の宣言をした天皇です。

1974年の調査から50年が経過した中尾山古墳は、世界文化遺産登録を目指す「飛鳥・藤原」の構成資産候補となっています。

（明日香村教育委員会文化財課）